

研究プロジェクト・論文

日本人大学生の外国語習得に見られる
異文化受容と性差

枝 澤 康 代

学芸学部・英語英文学科

1. 研究の背景

外国語/第2言語習得と性差に関する研究では、一般的に女性の方が男性よりも言語学習に優れていると言われている (Ellis, 1994)。学習ストラテジーや学習態度についての研究では、女性の方が男性よりも多くのストラテジーを使用し、目標言語学習に対して好意的な態度を示すことが明らかにされてきた (Bacon & Finneman, 1992; Oxford, 1993, ほか)。しかし、状況によっては、常に女性が優れているというわけではなく、男性が優れている場合や、男性と女性に差が見られないというデータも報告されている (Boyle, 1987; Baker & MacIntyre, 2000)。

言語習得の社会的・文化的側面では、外国語使用を自己の意思を伝え、意見を発信する機会とすることに、男性はより積極的であるのに対し、女性は情報や知識を受け取る機会とする傾向が強いことが報告されている (Gas & Varonis, 1986)。また、移民における第2言語習得やカナダにおけるフランス語のイメージ教育のような学習環境では、女性は、言語習得を職業や社会的アイデンティティと結びつける傾向が男性より強いことも指摘されている (Norton, 2000; Pavlenko & Piller, 2001)。

日本人英語学習者を対象とした外国語習得と性差の研究においても、女性の方がより多くのストラテジーを男性よりも使用し、肯定的な学習態度を示し、学習への動議付けも高いことが明らかとなった (Takahashi, 1997; 荻野, 1995; 平野, 2000; 平野、赤松&姉崎, 2001; 前田, 2003)。さらに、Kobayashi (2002) は、日本人女性のポジティブな英語学習態度の背景には、女性の職業観や海外旅行熱などと英語学習との結びつきが強く見られると指摘した。

一方、外国語習得と性差の研究において、異文化受容に対する男性と女性の動機付けや学習ストラテジーの違いについて論じた研究は少ないように思われる。学習ストラテジーに関する研究では、Oxford (1990) が開発した Strategy Inventory for Language Learning (SILL) のような質問紙を用いた実証的研究は多いが、文化/異文化受容についての包括的な質問紙調査はあまり行われていない。また、学習ストラテジーにおける性差の研究の対象者は、大学生を対象とするものより中学、高校生を中心とするものが多いように見受けられる。そこで、本研究は、英語を専門としない大学生 82 名を対象とし、英語習得と異文化受容に性別による差異があるかどうかについて実証的な研究を試みる。

2. 先行研究

外国語/第2言語習得における性差に関する研究は、学習ストラテジーにおけるものと、社

会的・文化的背景におけるものと大別される。

2.1 外国語習得における学習ストラテジーと性差

Takahashi (1997) は、幼稚園児を対象に、英語の学習方法と学習効果に性別による違いがあるかどうかを研究し、英語の歌詞を覚える課題に対して、女兒の方が男児よりも早く覚えたことを報告している。Takahashi はその理由として、女兒の方が課題曲を録音したオーディオ・テープをより注意深く聞き、正しく模倣をしたからであるとしている。一方違う指導法、すなわち体を動かしながら英語を習得するTPR (Total Physical Response) を採用したときには、男児の成績は女兒よりも良くなることを見出した。

平野 (2000) は中学生 174 名を対象に、平野、赤松、姉崎 (2001) は、中学生 174 名と高校生 149 名を対象に、英語語彙学習と性差の関係を 48 項目の質問紙を用いて研究した。この 2 つの研究対象の中学生は同じ中学生である。その結果、平野は女子の方が男子よりも多くの学習ストラテジーを使用していることを示した。また、平野、赤松、姉崎は、中学生と高校生では、使用するストラテジーに男子と女子の間に違いがあることを明らかにした。すなわち、「文脈・反復重視」の学習ストラテジーでは、中学生に男女差はなかったが、高校生では、女子が男子より有意に多く使用していること、また「興味・嗜好優先」の学習ストラテジーでは、中学生の場合、男子が女子よりも興味優先であるのに対し、高校生では男女差は見られないことが明らかにされた。これらの結果から、平野たちは、学習経験年数と性別によって使用するストラテジーに違いがあり、指導者はその違いを理解して指導する必要があることを指摘した。

前田 (2003) は、日本人高校生 1,584 名を対象に、英語力と使用する学習ストラテジーに性差があるかどうかを検証した。その結果、英語力には性差はないが、学習ストラテジーについては、女子高校生の方が男子高校生より積極的

に多様なストラテジーを使用していることを示した。そのことから、前田も指導法において性差に留意する必要性を指摘した。

2.2 外国語習得における社会的・文化的背景と性差

Ellis (1994) は、第 2 言語習得において女性が男性よりも成功する理由は、女性の積極的な学習態度にあるとし、特に目標言語を外国語として学習する環境では、「女性は外国語学習を重要な職業価値観を持つものとして認識しているが、男性はそのように認識していない」(pp. 203-204) と述べている。

Maltz & Borker (1982) は、第 2 言語学習における男女の談話の違いについて研究し、女性は男性よりもストレスに柔軟に対応し、友好的人間関係を維持しようと努めるが、男性は縦社会の人間関係の構築と維持を強調し、自己の存在と立場を主張すると指摘している。これは、男性と女性はそれぞれ違う育ち方をし、異なる文化背景を持つという Tannen (1990) の主張に通じるものである。Tannen によれば、女性は会話を人との調和を図るために使用するのに対して、男性は言語を報告と社会的競争における地位の維持に使用するという。

Gas & Varonis (1986) は、第 2 言語習得において目標言語のインプットのみならず、アウトプットすることが習得の前提条件であることを踏まえ、その習得変数の一つに学習者の性差があることに注目した。彼らは、日本人英語学習者 20 名を対象に、4 組の女性と男性の混合ペア、3 組の男性同士のペア、3 組の女性同士のペアを作り、自由会話と描画活動中の会話を録音し分析した。その結果、男女混合ペアにおいては、男性は、女性よりも、話題のトピックを突然に変える傾向があり、会話が途切れたときにその状況を救うために新しいトピックを提供するのは男性であることを明らかにした。さらに、1) 4 組の男女混合ペアのうち 3 組において、自由会話では男性は女性よりも発話語数が多く、すべての混合ペアで、会話を先に始め

たのは男性であった、2) 会話の発話回数には、男女差がなかった、3) 質問回数に関しては、男女差は見られなかった、4) 相手の話しに自分の話しをかぶせて発話する頻度は、2組の混合ペアに9回見られたが、そのうち8回は男性が話しを取ったことを明らかにした。

Nyikos (1990) は、135名のドイツ語を外国語として学習するアメリカ人大学生を対象に、ドイツ語名詞の記憶再生テストを実施し、女性の方が男性より記憶ストラテジーに有意に優れていることを明らかにした。Nyikosは、その背景には、記憶さえすれば高得点が取れるテストに対する男性と女性のアプローチの違いがあり、社会的要因があるのではないかと指摘した。

Kobayashi (2002) は、日本人学習者を対象に、社会的要因の観点から外国語習得と性差を研究した。Kobayashiは555名の日本人高校生を被験者とし、英語学習への認識度と個人的な英語学習について、以下の9項目を質問紙法で調査した。

- 1) 長期間の英語学習への態度
- 2) 文化とコミュニケーションへの興味
- 3) 学校における英語学習の受け止め方
- 4) 英語についてのイメージ
- 5) 英語学習活動
- 6) 英語4技能(speaking, listening, reading, writing)への自己評価
- 7) 自己申告による英語の成績
- 8) 課外での英語学習
- 9) 英語役割モデルの認知

その結果、1) 長期間の英語学習への態度、2) 文化とコミュニケーションへの興味、3) 学校における英語学習の受け止め方、4) 英語についてのイメージ、8) 課外での英語学習の5項目において、女子生徒が男子生徒より有意にポジティブな回答を示したことが分かった。Kobayashiは、このように女子生徒の英語への積極的な態度は、日本の社会環境と職業観が強く影響しているのではないかと指摘した。

一方、外国語習得において、男性の方が優位である、あるいは、差がないという研究もある。

Boyle (1987) は、香港の大学と高等専門学校に学ぶ中国人学生(285名+205名)を対象に、英語力と性差の研究を行い、10種類の一般的英語力測定テスト(Reading vocabulary, Listening passages, Dictation, Cloze test, etc.)と2種類のListening vocabulary test(音声提示された英単語を、絵と一致させる問題と、中国語と一致させる問題)を実施した。その結果、一般的英語力テストでは、女性が男性よりも有意に優れていたが、Listening vocabulary testでは、男性の方が女性よりも有意に成績が高かった。Boyleは、この結果について、中国語環境における男性の語彙能力発達が社会的に女性のそれと違うことが原因ではないかと推測した。

Scarcella & Zimmerman (2000) は、カリフォルニア大学アーヴィン校に在籍する学生で、アメリカの高等学校を卒業したが、英語を第2言語とする192名の移民学生を対象に、アカデミック語彙(大学の授業によく使用される語)の習得と性差について研究した。アカデミック語彙力を測定するために、彼らは50問の語彙テスト(Test of Academic Lexicon, TAL)を開発し、その成績を分析した。その結果、男子移民学生が女子移民学生よりも、TALにおいて、有意に成績が高かった。Scarcella & Zimmermanは、その理由を明確に説明する説はないとしながらも、被験者の文化背景と読書習慣の違いが結果に影響を及ぼしたかもしれないと指摘した。

Pica, et al. (1991) は、Gas & Varonis (1986) を更に発展させた研究を行い、日本人英語学習者と英語ネイティブ話者との英語による会話に、性別による差異があるかどうかを検証した。彼らは、被験者を英語学習者と英語ネイティブ話者に分け、さらにそれぞれ男性、女性に分けて4種類のグループを作り、日本人被験者の英語力に男女差がないことを確認(TOEFL平均点 男性:455.1、女性:455.4)した上で、それぞれの発話状況を分析した。その結果、どのようなグループでも、日本人英語

学習者の発話回数と発話状況に差はないことが明らかになった。しかし、女性（特に、英語話者の女性）の方が男性よりも一貫して状況を助ける質問をし、話者の意図を仲介する役割を果たしたことを指摘した。

以上の先行研究から、外国語／第2言語習得において、男性と女性の間には差が見られないとする研究もあれば、性差があるとする研究もあるが、言語習得には女性が男性を上回るとする研究の方が多いようである。また、その原因として、学習ストラテジーの違いと社会的・文化的要因を指摘するものが多い。

現在の日本社会において、英語習得への要望と願望は非常に高いと言える。文部科学省は、“英語が使える日本人”行動計画を発表し、TOEIC 730点以上を通用する英語力の一つの指標として示した（文部科学省、2002、『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想）。しかし、その目標に到達することは容易ではない。英語は、日本人にとって異文化とのインターフェースであり、英語圏文化をある程度受け入れないと上達は難しいといわれている。異文化受容スタイルにおいて、性別による差異があるかどうかを調査することは、英語学習ストラテジーと英語指導法の両面において重要であると思われる。

3. 研 究

3.1 目 的

本研究は以下の2点の検証を目的とする。

- 1) 英語学習能力、特に英語リスニング力において、女性の方が男性よりも優れている。
- 2) 異文化受容において、女性の方が男性よりも優れている。

3.2 方 法

被験者は、近畿圏の平均的な私立大学の経済学部と社会学部に学ぶ男女82名である。被験者の学部と男女構成は表1のとおりである。

英語能力（リスニング力）を測定するために、

表1 被験者の構成

	男 性	女 性	計
経済学部	36	9	45
社会学部	13	24	37
	49	33	82

標準テストとして一般に受け入れられているCELT (Form A) のリスニング部門を使用した。テストは多肢選択の内容理解問題（50問）であり、得点を100点満点で評価した。

異文化受容度を測定する質問紙は、Kelley, C. & Meyers, J. (1995) の作成した Cross-Cultural Adaptability Inventory¹ を元に、著者が日本語に翻訳し、また必要な項目を追加し、今回の調査では不適切と思われる項目を削除・修正したものをを使用した。この質問紙は、被験者の英語学習に関する基礎的な3問の質問（海外経験、中学以前の英語学習経験、現在の英語への関心度）と、文化の受容度についての48問の質問とからなっている。文化受容度への回答方法は、6段階評価（絶対にそう思う＝5、そう思う＝4、まあそう思う＝3、あまりそう思わない＝2、そう思わない＝1、絶対にそう思わない＝0）から1つを選ぶように指示した。（Appendix 参照）

3.3 結 果

3.3.1 英語リスニング力と性差

CELT (Form A) のリスニング部門の試験を実施した。受験者は欠席者を除く男子47名、女子32名であった。男子学生と女子学生の平均点を比較したところ、5%の危険率で、それぞれの平均点には有意な差があることが判明した。結果を表2に示す。

リスニングテストの結果から、本研究の大学生では、女子学生の方が男子学生よりも有意にリスニング力が優れていることが示された。

表2 リスニング力男女別平均点とt値

	Male	Female	t	df	p
CELT	35.7	40.0	-2.36	77	.021*

表3 英語学習と異文化受容に関する質問の男女別平均点とt値

	平均		t値	df	p
	Male	Female			
現在の英語関心度	2.94	2.36	3.02	78	0.00*
CUL 6	2.08	2.64	-2.19	80	0.03*
CUL 8	2.18	2.85	-2.50	80	0.01*
CUL 17	1.98	2.67	-2.67	80	0.01*
CUL 32	3.71	3.12	2.64	80	0.01*
CUL 33	3.20	2.52	3.09	80	0.00*
CUL 36	2.39	1.94	1.97	80	0.05*
CUL 39	3.04	3.52	-2.16	80	0.03*
CUL 45	3.13	2.30	3.97	79	0.00*
CUL 47	2.76	3.18	-1.87	80	0.06*

3.3.2 英語学習と異文化受容度調査

質問紙を集計し、英語学習に関する3問と異文化受容に関する48問について、性別ごとに平均得点を算出し、t検定を行った。その結果、5%の危険率で有意な差が見られた項目を表3に示す。

次に、文化受容度に関する48問について、主成分分析法を実施し、6因子を抽出して、バリマックス回転を行った。絶対値0.40以上の因子負荷量を示した項目は表4に示すとおりである。

各因子の項目内容について検討し、以下のよう

- 因子1：未知なもの（stranger）に適応性がある
- 因子2：未知なものに慎重で、受容が苦手である
- 因子3：未知なものを受容する
- 因子4：他人の評価を気にしないで、一人でいることができる
- 因子5：未知なものに関係なく、自己を肯定する
- 因子6：未知なものへのストレスに耐性がある

次に、抽出した6因子に関して、男性と女性の間

に回答の違いがあるかどうかを検討するために、性別ごとに各因子の平均点を算出し、t

検定を行った。その結果を表5に示す。

この結果から、因子1「未知なものに適応性がある」と因子2「未知なものに慎重で、受容が苦手である」には、男女の間に有意な意識の違いがあることが分かった。

さらに、その中でも以下の項目は男女別のt検定により5%の危険率で有意差が認められた項目である。

因子1：

Cul 6：私は設定した目標を、慣れていない環境の中でも達成できると信じている。

Cul 8：私はどんな種類の人とでも一緒にいるのが好きである。

Cul 17：私はどこでも生きることができるし、生活を楽しむことができる。

Cul 39：私は、私とは違う人に会うと、その人達からもっと学ぼうと興味をもつ。

因子2：

Cul 32：私は自分の行為が他人に与える影響を考える。

Cul 33：私は知らない状況に対して肯定的な態度で近づくのは難しい。

Cul 36：私は、私とは違う人に会うと、その違いに批判的になる傾向がある。

因子4：

Cul 45：私は、文化背景の違いにかかわらず、他人が私を尊敬することを期待している。

4. 考 察

4.1 英語力における性差について

本研究における女子学生は、男子学生に比べて、リスニングテストにおいて、平均点で4.3点勝る成績（女子：40.0、男子：35.7）を示した。女子学生の平均点は、英語を専攻とする学生の平均得点に比べると低いものであった²が、それでも男子学生と比べて統計的に有意に成績が高い。Ellis (1994) などの先行研究が示す

表4 抽出した6因子と負荷量

項目	負荷量	内 容
因子1 (未知なものに適応性がある)		
Cul 5	0.83	私はだれとでも付き合うのを楽しむことができる。
Cul 20	0.76	私は友達を簡単に作ることができる。
Cul 4	0.70	私はどこに行こうとうまく生活する能力があると確信している。
Cul 43	0.67	私は新しい、あるいは見慣れない環境の中でも、いつも心を開いている。
Cul 17	0.65	私はどこでも生きることができるし、生活を楽しむことができる。
Cul 6	0.57	私は設定した目標を、慣れていない環境の中でも達成できると信じている。
Cul 35	0.57	私は、新しい文化の中でどのように困難な感情を経験するとしても、うまくやっていくことができる。
Cul 41	0.55	私は新しい状況の中でも正確にコミュニケーションできる能力があると思う。
Cul 47	0.53	私は私とは違う人達と会うと、その人々を好きになると思う。
Cul 39	0.50	私は、私とは違う人に会うと、その人達からもっと学ぼうと興味をもつ。
Cul 8	0.47	私はどんな種類の人とでも一緒にいるのが好きである。
Cul 42	0.42	私は私と考え方の違う人と話すのが好きである。
因子2 (未知なものに慎重で、受容が苦手である)		
Cul 31	0.72	私を知る人は、私を他人との違いに我慢できない人間というだろう。
Cul 36	0.59	私は、私とは違う人に会うと、その違いに批判的になる傾向がある。
Cul 33	0.56	私は知らない状況に対して肯定的な態度で近づくのは難しい。
Cul 32	0.42	私は自分の行為が他人に与える影響を考える。
因子3 (未知なものを受容する)		
Cul 23	0.66	私はすべての文化は提供する価値があると信じている。
Cul 10	0.64	私が違う文化の人と働いているとき、その人たちの許可をもとめることは私にとって大切である。
Cul 13	0.62	私は新しいことが好きである。
Cul 12	0.50	私は、全ての人は民族が何であろうと、等しく価値があると信じている。
Cul 27	0.48	私は、人々の文化的な違いが私を受け入れるのにどのように影響するかを注意して見ている。
Cul 28	0.46	私は新しい経験が好きである。
Cul 37	0.42	私は、私とは違う人といるとき、その人達の行動を彼らの文化で(私の文化ではなく)理解する。
Cul 48	0.42	他の文化出身の人と会うとき、私はボディ・ランゲージ(ジェスチャーや目の動きなど)に注意する。
因子4 (他人の評価を気にしないで、一人でいることができる)		
Cul 44	0.75	私は私の不完全さを他人がどのように見ようとも受け入れることができる。
Cul 30	0.64	私は、たとえ私とは全く違う人々と一緒に働くとしても、めったに失望しない。
Cul 29	0.56	私は、たとえ周りを知らなくても、一人で居るのが好きである。
Cul 38	0.41	私は物事が明確でない状況の中でも働くことができる。
Cul 45	-0.57	私は、文化背景の違いにかかわらず、他人が私を尊敬することを期待している。
因子5 (未知なものに関係なく、自己を肯定する)		
Cul 40	0.71	私の個人的な価値体系(何が一番大切で、次は何かと考えること)は私自身の信念に基づいており、他の人々の基準にあてはめていたのではない。
Cul 25	0.63	たとえ新しい生活状況に失敗したとしても、私はまだ自分が好きである。
Cul 24	0.47	私は私の個人的価値観を自由に維持している。たとえその価値観を共有しない人々の中にも。
Cul 34	0.46	私は、たとえ周囲の人々が違う価値観を持っていても、自分の価値観で物事を決定することを好む。
Cul 14	-0.46	私は、もしゆっくりした生活のペースにあわさなければならないとすると、イライラするだろう。
因子6 (未知なものへのストレスに対応性がある)		
Cul 1	0.78	私は新しい状況のストレスに対応できる。
Cul 19	0.67	私は、たとえ私とは違っていても、人々がどのように感じているかを認識することができる。
Cul 46	0.65	私は新しい環境や新しい人々出会うことによるストレスを我慢することができる。
Cul 2	0.54	私は別の文化で充実した生活が出来ると思う。
Cul 7	0.47	私は自分が文化的に間違いをしたとき、自分を笑うことができる。
Cul 21	0.42	私は自分とは違う人に囲まれると、寂しいと感じる。

表5 6因子と性別による *t* 検定結果

	平均	平均	<i>t</i> 値	<i>df</i>	<i>p</i>	ケース数	ケース数
	Male	Female				Male	Female
因子1	2.28	2.64	- 2.08	80	0.04*	49	33
因子2	2.76	2.26	3.59	80	0.00**	49	33
因子3	3.40	3.47	- 0.55	80	0.59	49	33
因子4	2.48	2.53	- 0.38	80	0.71	49	33
因子5	2.68	2.67	0.13	80	0.90	49	33
因子6	2.65	2.78	- 0.83	80	0.41	49	33

“言語習得における女性の優位性” に一致する結果であると言える。

また、質問紙において、海外経験、中学以前の英語学習経験、および英語関心度（好き/嫌い）を調査したところ、英語関心度に明確な男女差が示された。女子学生は、5段階評価（大好き = 1 ~ 大嫌い = 5）において、平均 2.56 (SD: 0.72) であり、男子学生は 2.79 (SD: 1.02) であった。この結果は、明らかに女子学生の方が英語を好きだと思っている程度が男子学生よりも高いことを示している。言い換えれば、これは、“女性の方が英語にポジティブな学習態度を持つ” という、多くの学習ストラテジー研究が報告している結果と符合する。なお、その他の項目には女性と男性に有意な性差はなかった。

4.2 異文化受容における性差について

異文化受容についての質問紙調査においても、本研究の被験者たちは「未知なものへの適応性」と「未知なものに慎重で、受容が苦手」という2つの因子で、性別による有意な差を示した。すなわち、表3の結果が示すように、因子1の以下の項目において、女子学生は男子学生よりも統計的に有意に、未知なものに対して好意的な態度を示している。

Cul 6: 私は設定した目標を、慣れていない環境の中でも達成できると信じている。

Cul 8: 私はどんな種類の人とでも一緒にいるのが好きである。

Cul 17: 私はどこでも生きることができるし、生活を楽しむことができる。

Cul 39: 私は、私とは違う人に会うと、その人達からもっと学ぼうと興味をもつ。

これは、女性の方が、未知の文化に対して耐える力があり、その環境を楽しむことができ、さらには困難な状況を克服して、そこから学ぼうとする向上心があることを示している。言い換えれば、女性の方が異文化への適応性が高いと言えるであろう。

一方、因子2においては、男子学生は女子学生よりも、以下の項目で有意に平均得点が高いことが示された。

Cul 32: 私は自分の行為が他人に与える影響を考える。

Cul 33: 私は知らない状況に対して肯定的な態度で近づくのは難しい。

Cul 36: 私は、私とは違う人に会うと、その違いに批判的になる傾向がある。

この結果は、男性は、自分の行為が他人に与える影響を女性よりも深く考えるが故に、他人、あるいは未知のものへの行動が慎重となり、自分の立場の安全が保障されない未知な状況に批判的となり、受け入れることが難しくなるのではないかと考えられる。つまり、男性の方が異文化の適応性が低いと言える。

なぜ日本人男性は異文化に慎重であり、女性は異文化に柔軟性が高いのかについて即断する

ことはできないが、Malts & Borker (1982) や Gas & Varonis (1986) が示すように、日本にまだ残っている男性中心の社会的価値観と文化的な影響によるのかもしれない。すなわち、Kobayashi (2002) が主張するように、日本において女性の社会的地位は、近年向上したとは言え依然として低く、女性は男性のように社会の前面に出ることを要求されていない。したがって、女性は社会の主流文化に留まることから自由になることができ、異文化に対して高い興味を持ち、それを受け入れようとするのではないだろうか。一方、男性は、まだ伝統的な男性社会の価値観に縛られ、社会の主流文化に適應することの方が、異文化に適應するよりも重要なことであり、未知なものや異なる考え方に対して慎重な態度を取るのかもしれない。

さらに、因子4「他人の評価を気にしないで、一人でいることができる」では、「Cul 45: 私は、文化背景の違いにかかわらず、他人が私を尊敬することを期待している」の項目において、男子学生が女子学生よりも統計的に有意に得点が高かった。すなわち、男性の方が強く“自分の立場や地位の尊重”を期待していることを示している。

言い換えれば、このような日本人男性の自己立場の維持、さらに包括的に見るなら、自らの文化へのこだわりは、言語習得の立場から見れば、Gas & Varonis (1986) や Itakura (2001) の研究が示すように、第1言語の持つ文化規範が第2言語習得に影響を及ぼすことを説明していると言えよう。日本人男性は伝統的に権威の象徴とされ、面子を保つことが期待されてきた。一方女性は、1960年代以降の女性解放運動の影響を受けて社会進出を果たしてきており、それに相応しいプライドを持つようになったが、男性ほどに面子にこだわる必要がなく、その分、日本人女性は男性よりも、新しい言語と新しい文化に対して、失敗を恐れずに挑戦しやすい立場にあると思われる。

竹内 (2003) は、よりよい外国語学習者に関する先行研究をまとめ、学習成功者に共通の学

習ストラテジーには、必ず、目標言語の文化に対して興味を持ち共感すること、未知なものに対する不安や失敗を恐れない態度が含まれていると指摘している。また、異文化間コミュニケーションに関する研究は、異文化受容には、異なる文化を対等に受け止め、共感し、未知なものへの不安に対して耐性が必要であることを明らかにしている (Gudykunst, *et al.* 1995、他)。さらに、八島 (2004) は、日本人大学生の外国語学習動機と TOEFL の成績を比較し、学習動機の「異文化への友好」と「異文化への興味」が TOEFL の成績と有意に相関していることを報告している。

以上を勘案すると、本研究における女子学生が、男子学生よりも英語リスニングテストにおいて優れ、異文化受容度において高い適應性を示した背景には、社会的・文化的要因が影響しており、日本人女性は日本人男性よりも、よりよい外国語学習の readiness を持っていると言えるかもしれない。

5. ま と め

本研究は、外国語/第2言語習得をジェンダーの視点でとらえ、日本人大学生を対象に、彼らの英語学習成果と異文化受容に性別による差があることを検証した。その結果、英語学習能力、特にリスニング力において、また異文化受容の態度において、有意に性別による差異があることが示された。

しかし、この結果だけで女性の外国語学習の優位性を断定することはできない。今後さらに被験者数や英語力測定方法、また異文化受容に関する質問紙などの調査条件を整備して研究を続ける必要がある。

一方、本研究の結果は、性差を考慮にいたした外国語指導の必要性を示唆している。学習者の個性にあわせた、効果的な学習ストラテジーと指導法の開発に本研究が何らかの役割を果たすことが出来れば幸いである。

注

- 1) *Cross-Cultural Adaptability Inventory* (CCAI) は、異文化に対する個人の受容度を自己測定できるよう社会心理学の観点から作成された質問紙である。オリジナルは50項目からなるが、今回の調査では、その中から48項目を選んで使用した。
- 2) CELT (Form A) は、関西圏の女子大学英語英文学科において1年生のリスニング科目(必修)でほぼ毎年実施されており、その平均点は、概ね48点前後である。それと比べると、本研究における女子被験者の平均40点は、かなり低い。

参考文献

- Bacon, S. & Finnemann, M. 1992. Sex differences in self-reported beliefs about foreign-language learning and authentic oral and written input. *Language Learning*, 42 (4), 471-495.
- Baker, S. & MacIntyre, P. 2000. The role of gender and immersion in communication and second language orientations. *Language Learning*, 50 (2), 311-341.
- Boyle, J. P. 1987. Sex differences in listening vocabulary. *Language Learning*, 37, 273-284.
- Ellis, R. 1994. *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Gas, S. & Varonis, E. 1986. Sex differences in NS/NNS interactions. In R. Day. (ed.), *Talking to Learn: Conversation in Second Language Learning*. Rowley, MA: Newbury House, 327-351.
- Gudykunst, W., Ting-Toomey, S., Sudweeks, S. & Stewart, L. 1995. *Building Bridges: International Skills for a Changing World*. Boston: Houghton Mifflin Company.
- 平野絹枝. 2000. 「日本人 EFL 中学生の英語語彙学習ストラテジー——英語力と性差の影響——」『上越教育大学研究紀要』19, 2, 719-731.
- 平野絹枝、赤松信彦 & 姉崎達夫. 2001. 「日本人中学生・高校生の英語語彙学習ストラテジー——学習経験年数と性差の影響」『上越教育大学研究紀要』20, 2, 459-472.
- Itakura, H. 2001. *Conversational Dominance and Gender: A study of Japanese Speakers in First and Second Language Contexts*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Kelley, C. & Meyers, J. 1995. *Cross-Cultural Adaptability Inventory*. Minneapolis, MN: National Computer Systems.
- Kobayashi, Y. 2002. The role of gender in foreign language attitudes: Japanese female students' attitudes towards English learning. *Gender and Education*, 14, 2, 181-197.
- 前田啓朗. 2003. 「日本の英語学習者における学習ストラテジーと学習成果: 性差を考慮した適性処遇交互作用の観点から」『広島外国語教育研究(広島大学情報メディア教育研究センター外国語教育研究系)』6, 81-90.
- Maltz, D. & Borker, R. 1982. A cultural approach to male-female miscommunication. In J. Gumpers. (ed.) *Language and Social Identity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 文部科学省. 2002. 「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想の策定について」 Available : http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm [2002, July, 12].
- Nyikos, M. 1990. Sex-related differences in adult language learning: Socialization and memory factors. *The Modern Language Journal*, 74, 3, 273-287.
- Oxford, L. 1990. *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know*. New York: Newbury House.
- Oxford, L. 1993. Gender differences in styles and strategies for language learning. In Alatis, J. (ed.) *Strategic Interaction and Language Acquisition: Theory, Practice, and Research*. Washington, D. C.: Georgetown University Press, 541-557.
- 荻野健一. 1995. 「日本人 EFL 中学生の学習者特性に関する研究——学習スタイル、学習ストラテジー、動機付け、性差を中心にして——」『上越教育大学大学院学校教育研究科言語系

- コース (英語) 研究論集』10, 39-53.
- Pavlenko, A. & Piller, I. 2001. New directions in the study of multilingualism, second language learning, and gender. In Pavlenko, A. et al. (eds.) *Multilingualism, Second Language Learning, and Gender*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Pica, T., Holliday, L., Lewis, N., Berducci, D., and Newman, J. 1991. Language learning through interaction: What role does gender play? *Studies in Second Language Acquisition* 13, 343-376.
- Scarcella, R. and Zimmerman, C. 2000. Academic words and gender: ESL student performance on a test of academic lexicon. *Studies in Second Language Acquisition*, 20, 47-49.
- Takahashi, M. 1997. An explanation for differential success among foreign language learners in kindergarden: a comparison between girls and boys. 『日本児童英語教育学会 (JASTEC) 研究紀要』16, 57-69.
- Tannen, D. 1990. *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation*. New York: Morrow.
- 八島智子 2004. 『外国語コミュニケーションの情意と動機——研究と教育の視点——』吹田、大阪: 関西大学出版部

Appendix

基礎データ		
a	学籍番号:	
b	学部・学科:	
c	学年:	
d	性別: male female	
英語についての質問		
E 1	あなたは英語圏の国に留学/旅行の経験がありますか? (はい, いいえ)	
E 2	あなたは中学校入学以前に英語を学んでいましたか? (はい, いいえ)	
E 3	あなたは今英語が好きですか? (大好き=1 ~ 大嫌い=5)	
異文化受容について (絶対にそう思う=5 ~ 絶対にそう思わない=0)		因子
Cul 1	私は新しい状況のストレスに対応できる。	6
Cul 2	私は別の文化で充実した生活が出来ると思う。	6
Cul 3	私は会話をしているとき他の人の考えや感情を理解しようとつとめる。	
Cul 4	私はどこに行こうとうまく生活する能力があると確信している。	1
Cul 5	私はだれとでも付き合うのを楽しむことができる。	1
Cul 6	私は設定した目標を、慣れない環境の中でも達成できると信じている。	1
Cul 7	私は自分が文化的に間違いをしたとき、自分を笑うことができる。	6
Cul 8	私はどんな種類の人とでも一緒にいるのが好きである。	1
Cul 9	私は他人が私をどのように見ているかを現実的に認識している。	
Cul 10	私が違う文化の人と働いているとき、その人たちの許可をもとめることは私にとって大切である。	3
Cul 11	私は自分とは特別な興味を共有しない多くの人が好きである。	
Cul 12	私は、全ての人は民族が何であろうと、等しく価値があると信じている。	3
Cul 13	私は新しいことが好きである。	3
Cul 14	私は、もしゆっくりした生活のペースにあわさなければならないとすると、イライラするだろう。	
Cul 15	私は、自分とは違う背景から来ている人を採用しないといけないとすると、正しい判断ができる自信がある。	
Cul 16	私は、自分の考えが他人の考えと対立するなら、他人の考えよりも、自分の考えに従うだろう。	
Cul 17	私はどこでも生きることができし、生活を楽しむことができる。	1
Cul 18	私とは違う人々に私を印象付けることは、その人々と一緒にいるより大切である。	
Cul 19	私は、たとえ私とは違っていても、人々がどのように感じているかを認識することができる。	
Cul 20	私は友達を簡単に作ることができる。	1
Cul 21	私は自分とは違う人に囲まれると、寂しいと感じる。	6
Cul 22	私は新しい食べ物を試してみることはしない。	
Cul 23	私はすべての文化は提供する価値があると信じている。	3
Cul 24	私は私の個人的価値観を自由に維持している。たとえその価値観を共有しない人々の中にも。	5
Cul 25	たとえ新しい生活状況に失敗したとしても、私はまだ自分が好きである。	5
Cul 26	私は自分とは違う人を理解するのが上手ではない。	
Cul 27	私は、人々の文化的な違いが私を受け入れるのにどのように影響するかを注意して見ている。	3
Cul 28	私は新しい経験が好きである。	3
Cul 29	私は、たとえ周りを知らなくても、一人で居るのが好きである。	4
Cul 30	私は、たとえ私とは全く違う人々と一緒に働くとしても、めったに失望しない。	4
Cul 31	私を知る人は、私を他人との違いに我慢できない人間というだろう。	2
Cul 32	私は自分の行為が他人に与える影響を考える。	2
Cul 33	私は知らない状況に対して肯定的な態度で近づくのは難しい。	2
Cul 34	私は、たとえ周囲の人々が違う価値観を持っていても、自分の価値観で物事を決定することを好む。	5
Cul 35	私は、新しい文化の中でどのように困難な感情を経験するとしても、うまくやっていくことができる。	1
Cul 36	私は、私とは違う人に会うと、その違いに批判的になる傾向がある。	2
Cul 37	私は、私とは違う人といるとき、その人達の行動を彼らの文化で(私の文化ではなく)理解する。	3
Cul 38	私は物事が明確でない状況の中でも働くことができる。	4
Cul 39	私は、私とは違う人に会うと、その人達からもっと学ぼうと興味をもつ。	1
Cul 40	私の個人的な価値体系(何が一番大切で、次は何かと考えること)は私自身の信念に基づいており、他の人々の基準にあてはめていない。	5
Cul 41	私は新しい状況の中でも正確にコミュニケーションできる能力があると思う。	1
Cul 42	私は私と考え方の違う人と話すのが好きである。	5
Cul 43	私は新しい、あるいは見慣れない環境の中でも、いつも心を開いている。	1
Cul 44	私は私の不完全さを他人がどのように見ようとも受け入れることができる。	4
Cul 45	私は、文化背景の違いにかかわらず、他人が私を尊敬することを期待している。	4
Cul 46	私は新しい環境や新しい人々に出会うことによるストレスを我慢することができる。	6
Cul 47	私は私とは違う人達と会うと、その人々を好きになると思う。	1
Cul 48	他の文化出身の人と会うとき、私はボディ・ランゲージ(ジェスチャーや目の動きなど)に注意する。	3